

専門高校（工業系）におけるコミュニティ・スクールの導入

ーより良いキャリア教育に向けて、「課題研究」を活用したモデル授業の提案ー

上部 孝典^{*1}・松岡 敬興

Introduction of community school in specialized (Technical) high school :
Proposal of model lessons utilizing "Exploratory learning" for better career education

UWABE Takanori^{*1}, MATSUOKA Yoshiki

(Received August 3, 2020)

キーワード：コミュニティ・スクール、キャリア教育、資質・能力、カリキュラム・マネジメント

はじめに

コミュニティ・スクール（以下コミスク）については、2000年の教育改革国民会議報告において「教育を変える17の提案」がなされ、新しい時代にふさわしい学校づくりとして、「新しいタイプの学校（コミスク等）」の設置を促進することが提案された、この学校運営協議会（以下協議会）は、保護者や地域住民の意見を学校運営に反映し、地域とともにある学校づくりを実現するための仕組みであり、2004年に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正」によって制度化されて以来、設置後の成果に関する認識とともに、全国の広がりを見ても増加してきている。

山口県においても、地域とともにある学校づくりを進めるため、学校運営協議会制度と地域協育ネット（地域学校協働本部）を設けた「やまぐち型地域連携教育」を中心として行い、「地域教育力日本一の実現」を目指している。そして2020年度までに、協議会を県内すべての小学校、中学校、高等学校において設置し、各学校が特色ある取組を行うこととなっている。2016年には、山口県内の小中学校においては全ての学校が設置となり、県立学校においても2016年から協議会の設置がはじまっている。高等学校においては、全国的に見ても急速に設置校数は増えているものの、過去の設置校が少なく実践事例に乏しい現状がある。令和2年度から公立学校の全てがコミスク設置となるため、そのため山口県高等学校においては、特色ある取組をどのように行っていくかの試行をしており、いかにして協議会を運営していくべきか、そのより良い仕組み作りへ向けて導入方法が各学校において検討されている。導入方法としては、キャリア教育、地域課題の解決、学校連携など様々な視点で取組が見られる。そこで本件研究では、「専門高校（工業系）におけるコミュニティ・スクールの導入ーより良いキャリア教育に向けて、「課題研究」を活用したモデル授業の提案ー」について、どのようにして協議会を導入し、効果的な活用と運営を行っていくべきか具体的な方策について提案することをねらう。本研究が、県内高等学校におけるの更なる取組の促進や全国的な協議会導入への一助となることを目指す。

1. 研究の意図

本研究の目的は、山口県立の専門高校（工業系）におけるコミスクの取組について、導入期における方法や成果、課題を明らかにし、改善の具体的な方策を提案することにある。山口県はコミスクの主な機能として「学校運営」、「学校支援」、「地域貢献」の3つを設定し、高校は校区も広く、その性質から特色を生かした取組ができるように「テーマ型」で取り組んでいる学校が多い。そこでコミスクの機能の活用について明らかにし、子供たちにとってより良い学校教育の推進につなげたい。

*1 山口県立宇部工業高等学校（平成30年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻学校経営コース）

本研究の動機は、筆者が原籍校で勤務してきた8年間にある。入学してくる多くの生徒は、高い専門性と就職率の良さに魅力を感じ入学してきている。しかし、就職している生徒の中には早期離職をしているものが少なからず存在し、そのことが教師として学校としても課題である。早期離職の理由の多くは、職場の人間関係に悩んだことに端を発し、異年齢とのコミュニケーションを苦手としている者ほど離職しているように感じる。社会におけるコミュニケーション能力の必要性は、高校、大学共に「新卒新入社員に求められる力」として毎年上位に位置し、学校現場においてはそれが身に付くように様々な教育活動を行っているが、いまだに社会からの要求は解決していない現状がある。

そこでコミスクの機能を活用し、原籍校の取組を多様な観点から見直し、より良い学校教育について考え、生徒たちのコミュニケーション能力を含めた基礎的・汎用的諸能力の育成、キャリア教育につながる取組に発展させていきたいと考えた。図1にそれらをまとめた「学校運営協議会の仕組み活用による好循環イメージ図」を示す。本研究は、この好循環イメージ図を研究の軸として考えて展開してきた。

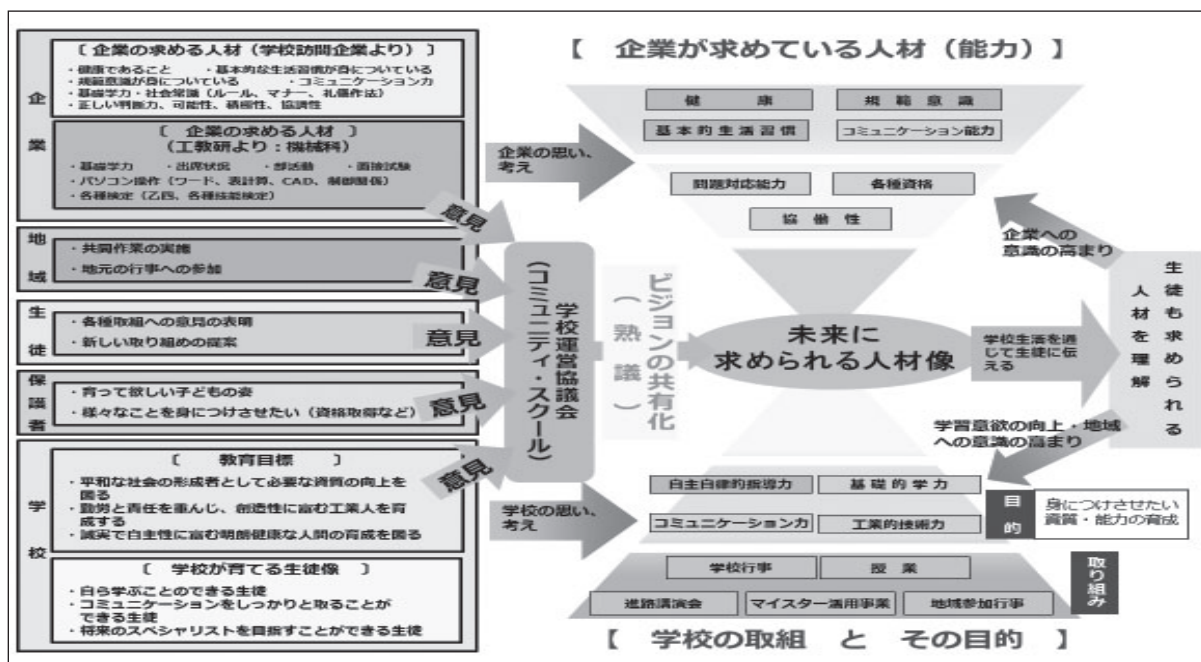


図1 学校運営協議会の仕組み活用による好循環イメージ図

研究の基礎研究として「原籍校学校行事調査」、「原籍校教職員への聞き取り調査」、「山口県立専門高校（工業系）の学校運営協議会設置校へのアンケート調査とコミスク担当者への聞き取り調査」、「各校務分掌主任への学校行事の目的調査(社会人基礎力とESDの視点)」、「学校運営協議会委員へのアンケート調査」を行った。

「原籍校の教職員への聞き取り調査」においては、学校行事についての目的、めあてについても聞き取りを行った。その結果、個人的な思いや目的はあるが、学校として統一しためあてがはっきりせず、曖昧な部分があることがわかった。そこで、原籍校では就職する生徒が多いことを踏まえ、社会人として必要な力を身に付けておくべき基礎的・汎用的諸能力を項目として設定し、調査してみることにした。項目選定基準は、原籍校の生徒は、卒業後の進路選択として就職を選ぶ者が9割を占めている状況からも、高校から企業へのスムーズな移行が求められている。そこで社会が求める人材の能力基準として経済産業省が示している「社会人基礎力」と、5年前から原籍校で取り組んでいる「持続可能な開発のための教育（以下ESD）」の二つの視点を項目として活用し再調査を行った。各項目については図2に示す。

社会人基礎力について				ESD												
前に踏み出す力		考え抜く力		チームで働く力		ESDの7つの力										
主体性	働きかけ力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	批判的に考える力	未来像を予測して計画を立てる力	多面的、総合的に考える力	コミュニケーションを行う力	他者と協力する態度	つながりを尊重する態度	進んで参加する態度

図2 社会人基礎力とESDについての調査項目

2. 調査結果の分析

「学校行事調査結果」から生徒たちのタイトな生活の様子が浮かび上がった。また、行事を行う場所には、教職員が必ず関係していることから、休日に行われる業務を見直すことで、働き方改革にもつながると考えた。「原籍校教職員への聞き取り調査」を行った結果、まず協議会の認知率については協議会について「説明ができる」、「少し説明ができる」が、全体の28.2%と全体の約三割の教員しか理解していない状況であり、協議会の理解を深めていくことが、学校での取組推進の第一歩となるため、理解を深める取組が必要であった。そこで、研修会を2回ほど実施した結果、協議会について「説明ができる」、「少し説明ができる」が、82.3%まで向上することができた。

「山口県立専門高校（工業系）の学校運営協議会設置校へのアンケート調査とコミスク担当者への聞き取り調査」については、県内の県立県内専門高校（工業系）11校（2019年より協議会を設置する学校を含む）へ訪問し聞き取りを行った。コミスクの導入において、多くの学校が既存の学校行事をベースに学校支援や地域貢献の取組を行っていた。その際、新しい取組を始めた学校は11校中4校であった。コミスク担当職の教職員を基本的には置かず、管理職がその役割をしている場合が多く、特に教頭が中心となって進めている実情があった。この傾向は、学外との連絡・交渉が多いため、管理職が直接やり取りをする方が、業務を運営していく上では、都合がよいためだと考える。

また、設置した学校の環境から、コミスクへの取組に温度差があった。既存の学校行事をベースに始めるので、過去の地域との連携や関係性が大きく影響しており、商業科、農業科を設置している学校は特に、地元とのつながりが顕著であり、活発な地域交流が見られた。コミスクの取組を行っていくために、いくつか共通点も見えてきた。まず、外部団体（市役所、商工会、地域団体など）が組織的にまとまり、代表者を決めることで、取組が促進されていた。学校の取組を理解した学外組織の代表が、関係各所に連絡を取り、調整まで行っている場合スムーズな取組の推進につながっていた。行政（市役所、教育委員会、大学）商工会、観光協会、自治会長などある程度のみとまりを有するほうが話を進める上での負担感がなさそうであった。学校でのコミスクの取組の障壁として、連絡する場所や連携できる機関などの調節業務の難しさがある。それを一手に引き受けてもらえる外部機関が存在することは取組の活性化につながることも予想された。次にコミスクの活動予算が少ないことにも課題がみられた。予算を適切配置し、運用できる仕組み作りが必要であると感じた。

そして、協議会の運営状況には地域差があった。学校と地域の結びつきが強く、長年連携した行事を行っていた地域では、学校運営に関わる土壌が醸成されており、積極的な発言や学校に対する要望が提言されるなど、積極的な会議になっていた。また、特色ある取組を行っていくベースの部分として、観光資源的なものがある地域の方がそこを中心にアイデアを考え付き易いなどの意見もあった。「学校について」となると、発言する際にも敷居が高くなりがちであるが、「地域の観光名所や著名な人物の活用」といったテーマについては、協議会委員も発言がしやすく、活発な活動へとつながりやすい傾向があった。

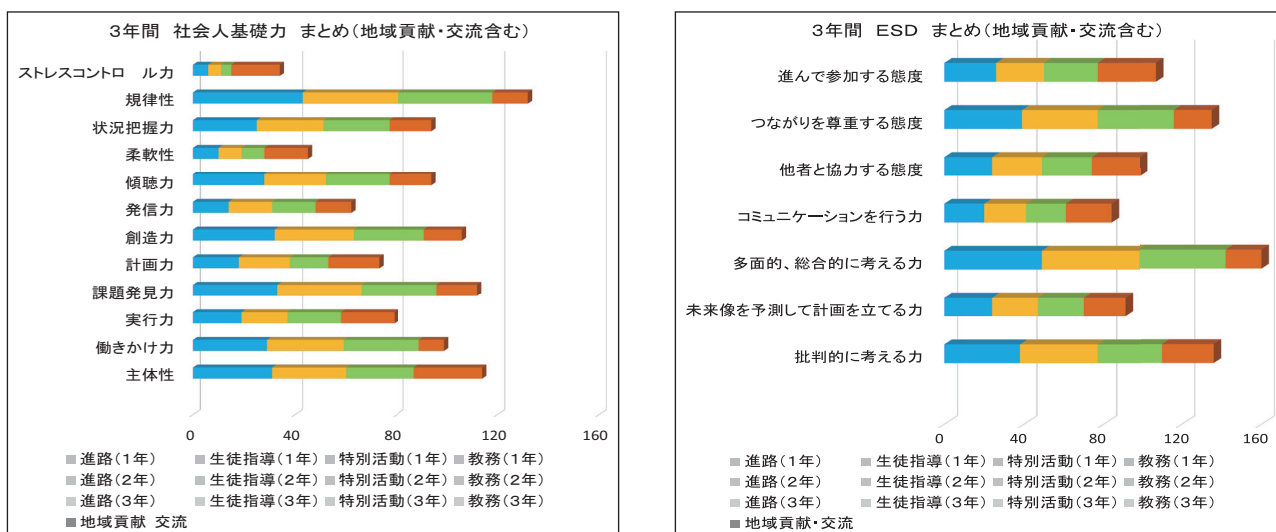


図3 学校行事について、社会人基礎力とESDの視点で調べた調査結果 まとめ

「各分掌主任への学校行事の目的調査」の結果、「社会人基礎力」と「E S D」の二つの観点での調査結果を以下の図3へ示す。

図3に示したように、学校行事について「社会人基礎力」の視点においては、「ストレスコントロール力」と「柔軟性」が低い値となった。E S Dにおいては、「コミュニケーションを行う力」「未来像を予測して計画を立てる力」が低い値となった。ただし、この値は、学校行事のみについて調査した結果であり、生徒が指導や経験する場合は、部活動や家庭環境などにも影響されるため、一概に能力が育っていないものを表現しているわけではない点にも注意が必要である。しかしながら、学校行事以外で補えない生徒の場合、卒業後の離職に関係しそうな部分が低いという課題が明らかになったともいえる。そして地域貢献・交流行事に参加している生徒については、それを補っている結果も見取れた。これは、積極的に地域と交流するなかで、様々な体験をすることで不足している部分を補う可能性を示唆しているともいえる。地域貢献・交流行事の活用を検討していく必要があることが分かった。また、図2の踏査の過程において、各分掌、各科、各教科別で行われている学校行事すべてについて調査しなおした。その結果、真締川清掃のようなボランティア活動より、クラスマッチなどの方が、様々な能力値にチェックが付いた。これは行事の主体が誰にあるのかという部分が影響していると考えられる。「学校運営協議会委員へのアンケート結果」から、コミュニケーション能力についての意見が多く集まり、そこに課題があることが分かってきた。それに合わせて「明るさ」や「元気な声」、「主体性・積極性」など、コミュニケーション能力に関係する諸能力が多く求められていた。

3. 調査結果からみえてきた課題

ここまでの経緯を踏まえ、原籍校において行われている教育について、より焦点を絞って教育を行うことが必要であると判断した。原籍校での教職員への聞き取りと協議会での議題から考えると、「社会に求められる人材」について、より良いキャリア教育を行っていくことを中心的課題と捉え議論していくことが求められ、特にコミュニケーション能力については喫緊の課題ともいえる。そのために、「協議会の活用」と「学校における生徒指導、教科、学校行事」を上手く連動させた取組を行い、その検証が必要であると考え。特に校外行事において、2-5で示したグラフにもあるように、地域貢献・連携行事を行った場合、基礎的・汎用的な諸能力が伸びる可能性が示された。こうした取組を、均等に生徒に与えることによることで、基礎的・汎用的な諸能力の育成、キャリア教育、郷土愛など様々な教育効果へとつながることが予測される。しかしながら、タイトな学校生活の実態からも学外行事の増加には厳しい現状がある。そこで、各科3年にある「課題研究」を活用し、学校の特色を生かしつつ、授業の中で学外と連携を図ることで同質の効果が見込めると考え、カリキュラム・マネジメントの一環として学校の教科として取り組んだものを提案した。そして、協議会によって、目的やビジョンを共有し、教育を行う事で「生徒」、「教職員」、「地域」のいずれも少なくなる。そこで本研究の取組の一環として、協議会でどのような生徒について育てていくべきかを、課題解決に向けて協議会委員で検討を行い、熟議等の活用的により課題解決に向けて取り組んだ。さらに場合によっては、熟議へ生徒を招聘し、生徒の意見も聞き出しながら学校としてどう行った教育を行うべきか検討した。

4. 課題解決のための、原籍校での新たな取組の提案

各調査から明らかになった、原籍校の課題解決に向けた取組を以下へ示す。

- 1 「目的、めあてを各取組においてきちんと設定し、教職員が共通の指導観を持って取り組む」
- 2 「学校運営協議会での学校としてのテーマを決定し、より良い仕組み作り」
- 3 「生徒の地域貢献・交流行事を活用し、より良いキャリア教育につながる取組の模索」

原籍校の課題解決に向けた取組

上記の「原籍校の課題解決に向けた取組」に2については、学校運営協議会のより良い機能の活用について「協議会の中心テーマ：社会で求められるコミュニケーション能力」として定め、いかに学校として取り組むべ

きかを中心事項として議論していくこととした。

そして上記の「原籍校の課題解決に向けた取組」の3については、3年生で行われている課題研究を活用し、学外交流をカリキュラムに取り入れたモデル授業を提案し、その効果の調査、研究を行った。研究の取組テーマを以下に示す。

- ・ 特別支援学校と連携した、ユニバーサルデザインを意識したレーザーハープの改良
- ・ 知的財産教育・特許技術の開発の学びを活用した高大連携
- ・ 環境教育プログラム（ESD関連事業）の取組を活用した地域貢献・交流事業
- ・ 高大連携を活用した、オープンデータを活用した地域の防災避難経路マップの作成

課題研究の取組テーマ

これらの取組について、「社会人基礎力」と「ESD」の視点においてリフレクションシートに授業ごとに記入を行い、その変化を見取った。その際、自由記述も同時に行い、心情的な変化についても変容を追った。

5. 課題解決における取組の結果と分析

前述した原籍校の課題解決に向けた取組内容の2については、実際の取組として学校運営協議会の機能を活用し「社会に求められるコミュニケーション能力」をテーマに掲げ、そこに関係する2つの内容について協議会委員、教職員、生徒を交えた熟議を行った。右に協議会の熟議の様子を示す。「社会人に求められる諸能力」については、コミュニケーション力、規範意識(礼儀)、アイデア性、対応力、主体性、判断力、継続力、思いやり、向上心、協調性といった内容が各班から意見が出た。特に、コミュニケーション関係、主体性、規範意識のことが各班から共通してでた。次に、「コミュニケーション力」については、挨拶や言葉遣い、人の目を見て聞く、相手の立場に立つなどの意見が多く見られた。



図4 学校運営協議会での熟議の様子

生徒は予想していた以上にコミュニケーションに気を遣っていることが読み取れた。特に他者からの言葉に対して「リアクションをする」という部分においては、大人の方からは多くの賛同を熟議中に得ており、生徒自身がコミュニケーションに必要なものを意識できていることが理解できる結果となった。この結果からも、大人と生徒の意見の大きな相違は見られなかった。これら能力が身に付いていない生徒に対する指導が課題として明らかとなった。生徒を入れて熟議をすることで、生徒たちが日々何を思い、考えているかを知ることができた。今回、熟議のメンバーに生徒会長が参加したことで、熟議に刺激を受け全校集会の場で自主的に全校生徒に訴えかける動きがあった。教職員が話すのではなく、生徒が同じ生徒に対して、自らの意思で話したことは、協議会の思いを伝える流れ作りのきっかけとなる重要な点である。生徒以外にも教職員や地域、保護者もビジョンを共有し、あらゆる角度から生徒にアプローチをかけていける環境づくりが今後の発展的課題として残された。

前述した原籍校の課題解決に向けた取組内容の1、3については、「課題研究を活用した、より良いキャリア教育に向けたモデル授業の提案」実践した結果、学校の課題であった「ストレスコントロール力」、「柔軟性」、「コミュニケーションを行う力」について改善の可能性があることが分かった。その結果を図4に、学外交流を終えた時の自由記述の一部を次頁に示す。既存の行事を活用し、カリキュラムに組み入れることで持続可能な取組へとつながる可能性が分かった。そ



図5 課題研究に掛かる活動の様子

の他、学習内容が実社会と繋がることで、学習意欲の向上や専門性の深化、やりがい、自己肯定感の高まりも自由記述より見て取れた。ただし、今回の研究は交流回数、課題研究内容、参加している生徒の質にも影響を受けるために一概に比較することが困難な部分があった。生徒の実態に合わせた自己評価方法の改善や課題研究の取組内容の精査、適切な交流回数・期間の検討も今後の課題として判明した。

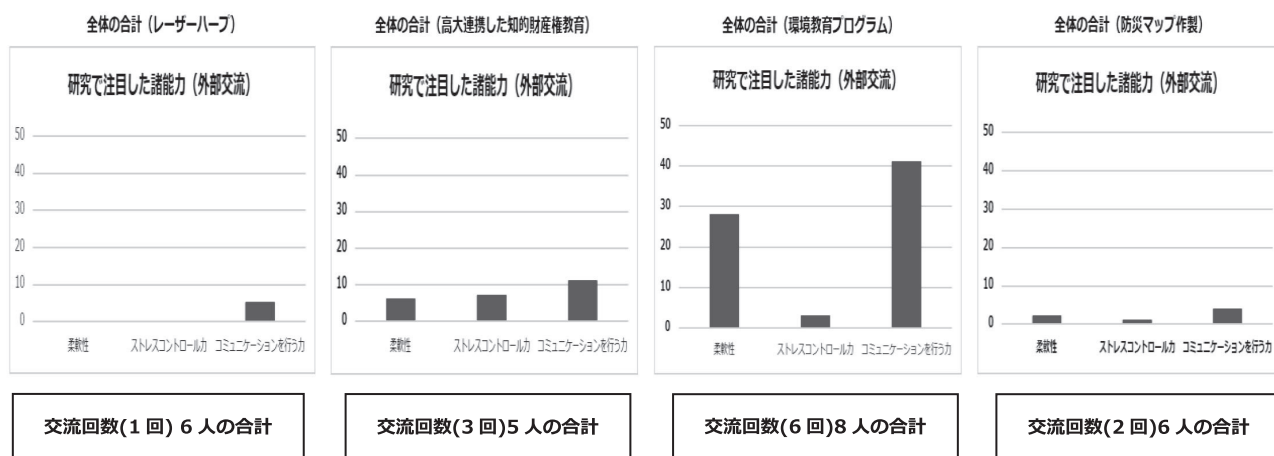


図6 「課題研究を活用した、より良いキャリア教育に向けたモデル授業の提案」の実践結果

表1 『学外交流後』と『翌週の週課題研究』での生徒の自由記述について

<p>特に変容を感じた生徒の自由記述の抜粋 (【A: 学外交流を終えて】と【B: 翌週の課題研究の時間】)</p> <p>(A) 初めての発表なのでとても緊張しました。コミュニケーションの大事さ、楽しさを味わうことができました。とても充実した時間でした。とても良かったです。</p> <p>(B) 電気科の発表がある為、頑張っって役割と原稿作成を頑張りました。もう、課題研究の日数が少ないので、まだまだもっと色々なことを学びたいと思いました。</p> <p>(A) 体が不自由な人がレーザーハーブを使うときの、難しさや使いやすいうように改善点を教えてもらうためです。レーザーを見えるようにするや音がブツブツ切れないで続くようにしてほしいなどの沢山の意見をいただくことができました。この意見を参考にして、もっと良いレーザーハーブにしたいです。</p> <p>(B) 何をするのだろうと楽しみにしていた。レーザーハーブの改良かと思っていたが、発表の準備という事で、少し気分が下がった。発表の手順を決めて、本番でスムーズに進むようにした。発表では、パワーポイントを使うので、資料の作成をした。レーザーを見やすくするために加湿器を使用してみたが、水蒸気の量が少なすぎて使用を諦めた。</p>
<p>特に変容を感じた生徒の自由記述の抜粋 (【A: 学外交流を終えて】と【B: 翌週の課題研究の時間】)</p> <p>(A) 今回の授業は小野に行くことを知っていたので、とても楽しみでした。スケジュール作成では、自分の意見を進んで話せたので良かったです。次回の課題研究は実際に竹林伐採しに行くのでしっかりと行動できるようにしたいです。</p> <p>(B) 今回の授業は、初めての竹林伐採だったので、少し不安な気持ちがありました。実際にやってみると想像以上に難しく大変でした。しかし、前もって班を作っておかげで、後半はスムーズに作業を進めることができました。今回で学んだ事を活かしていけるように次回も積極的に取り組みたいと思います。</p> <p>(A) 今回の授業を受ける前は、話し合えるかが分かりませんでしたが、積極的に発言しようと意識を持って臨みました。今回はSDGsのことで何が出来るかを考え合いました。この課題を解決するために意見をよく聞こうと思いました。今回で学んだことをいかしていけるように次回も積極的に取り組みたいと思います。</p> <p>(B) 今回の授業を受ける前は、実際に竹林を見て、計画を立てるという事だったので、楽しみでした。今回は人とコミュニケーションを取ることを積極的にしようと心掛けました。今回の授業では、全員が参加しないと成り立たないので、班での話し合い方を学びました。</p>

6. 総合考察

本研究の成果は、図1の「学校運営協議会の仕組みの活用による好循環イメージ図」に示した「学校運営協議会の機能の活用」により「未来に求められる人材像」に必要な諸能力を特定したことが挙げられる。その特定した諸能力を身に付けさせるために、授業に学外交流を活用しキャリア教育に資質・能力の視点を取り入れた、モデル授業の提案を行ったことである。その際、「地域にある教育力との持続可能な取組」も意識した。今後の世界は「Society 5.0」、「人生100年時代」とも言われ、今までよりさらに進んだ世界が訪れることが予測されている。そうした世界に対応していくためにも、「資質・能力」の部分で教育を行っていく必要がある。その取組の一端として行った今回の調査は、一定の価値があると考えられる。学校ごとの特性考えつつ、資質・能力の視点をもって教育に取り組むことは今後ますます求められてくる。

そして本研究では、原籍校において調査した結果を学校の課題とし、「社会で求められるコミュニケーション力」をテーマに協議会において話し合いが深まった。協議会の機能をより活性化し、議論を活発にするには、学校としての課題が明らかである場合はそれをテーマに議論を行う事で活発に意見が出やすく、課題が不明瞭な場合は、学校の実態調査から始めることが有効となることも明らかになった。

今回の研究で、協議会委員や企業で働いている人（卒業生含む）に対して、アンケートや聞き取り調査を行った。その結果をまとめた一部を図5示す。図5に示されたものの中で、年代別に求められる諸能力について特徴と傾向が明らかになった。本研究でも課題として挙がっていたコミュニケーション能力については、年代問わず求められる能力であることが判明した。コミュニケーション能力における課題解決に重点をおいて取り組んできた本研究の正しさを後押しする結果が得られた。その他には、課題解決能力についても求められていることも分かった。年代を越えて求められる能力は、学習指導要領においても記載され、今後の子供に求められており、これは学校教育と実社会の繋がりが一定程度証明できたとも言える。

今回の研究で「より良いキャリア教育に向けて、課題研究を活用したモデル授業の提案」として、課題研究に学外交流を取り入れたモデル授業を4つほど行った。今回のモデル授業の特徴は、カリキュラムに地域貢献・交流行事を取り入れた点である。前章において、学校支援、地域貢献・交流行事が諸能力の底上げにおいて貢献しているデータを示した。伝統校である原籍校においては、学校行事や部活動、資格試験や定期考査などタイトな学校生活を生徒が行っている。休日には学校行事以外の学校支援、地域貢献・交流行事も数多く行われており、これ以上行事を増やすことより難しい中で学校の課題解決に向け、カリキュラムに落とし込んでいくことで持続可能な取組へとつながると確信している。山口県がコミスクについて打ち出している「学校・学科の特色や専門性に応じた高校ならではの取組の推進（地域の活性化に直接貢献する活動）」とあることから、特色を活用し、地域貢献・交流を意識した活動に取り組まなければならない状況がある。原籍校のタイトな状況と県の方針というジレンマを解決する取組として今回のモデル授業を考えるに至った。当然、一時的な取組ではなく持続可能な取組として位置付けることも重要である。そして、「課題研究」というカリキュラムに学外交流を取り入れることで、学校の課題解決のみならず、山口県が推進する「やまぐち型地域連携教育」にもある学校連携、地域連携・課題解決にも寄与できることを一定程度示した。

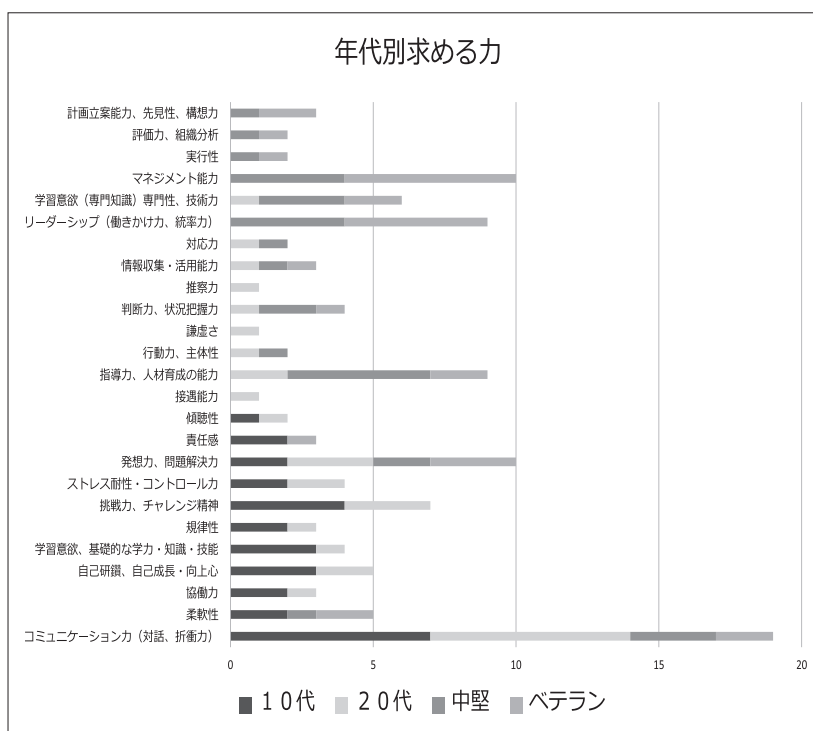


図7 社会で求められる年代別資質・能力についての聞き取り結果

山口県がコミスクについて打ち出している「学校・学科の特色や専門性に応じた高校ならではの取組の推進（地域の活性化に直接貢献する活動）」とあることから、特色を活用し、地域貢献・交流を意識した活動に取り組まなければならない状況がある。原籍校のタイトな状況と県の方針というジレンマを解決する取組として今回のモデル授業を考えるに至った。当然、一時的な取組ではなく持続可能な取組として位置付けることも重要である。そして、「課題研究」というカリキュラムに学外交流を取り入れることで、学校の課題解決のみならず、山口県が推進する「やまぐち型地域連携教育」にもある学校連携、地域連携・課題解決にも寄与できることを一定程度示した。

おわりに

学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が、高校と社会の接続を改善できる重要な手法の一つとして示すことができたと考える。進学した生徒も、いずれは進学先の知識を活用した仕事に就くことが予想され、生徒を如何に社会にソフトランディングさせ、上手く移行させていくための手立てを実施することが、高校に求められている。山口県教育の発展の為、今回の研究で判明したことを活用し、もさらなる実践を積み重ねる所存である。

付記

本論文の内容は、山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の実践研究報告書に加筆・修正を加えたものである。

参考文献

- 金子郁容・鈴木寛・渋谷恭子（2000）：『コミュニティ・スクール構想』，岩波書店。
- 小西哲也・中村正則（2019）：『奇跡の学校～コミュニティ・スクールの可能性～』，風間書房。
- 佐藤晴雄（2010）：『コミュニティ・スクールの研究 学校運営協議会の成果と課題』，風間書房。
- 佐藤晴雄（2017）：『コミュニティ・スクールの成果と展望－スクール・ガバナンスとソーシャル・キャピタルとしての役割－』，ミネルヴァ書房。
- 佐藤晴雄（2018）：『コミュニティ・スクールの全貌－全国調査から実相と成果を探る－』，風間書房。
- 霜川正幸・静屋智（2014）：コミュニティ・スクールの実効性を高める運営のあり方，『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第38号』。
- 静屋智・池田廣司・長友義彦・前原隆志（2017）：コミュニティ・スクールとしての学校運営にかかる一考察，『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第44号』。
- 溝上慎一（2018）：『大学生白書』，東信堂。
- 上部孝典（2019）：専門高校（工業系）におけるコミュニティ・スクールの導入－より良いキャリア教育に向けて「課題研究」を活用したモデル授業の提案－，『平成30年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻実践研究報告書』。
- 諸富祥彦（2007）：『「7つの力」を育てるキャリア教育－小学校から中学・高校まで－』，図書文化社。
- 山口県教育委員会（2018）：『平成29年度やまぐち型地域連携教育実践事例集』。
- 山下貴弘（2019）：『地域と学校の連携・協働に向けた現状と課題に関する研究－企業の教育に対する関心に関するアンケート調査結果の考察を中心に－』，中国四国教育学第71回大会。

〈Web掲載資料〉

経済産業省：「人生100年時代の社会人基礎力」説明資料

<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html>（2020年1月13日確認）

文部科学省：コミュニティ・スクールの導入・推進状況（平成30年度4月）

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/community/shitei/detail/1405722.htm（2020年1月13日確認）

山口県教育庁教育政策課：平成31年度（2019）山口県教育推進の手引き

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a50100/dctptebiki/h23dctpguide.html>（2020年1月13日確認）